

下記の聖書の箇所のもーせのことば「それでよいとした」は どういう意味ですか？

"アロンはモーセに言った。「見なさい。今日、彼らは自分たちの罪のきよめのささげ物と全焼のささげ物を主の前に献げたが、このようなことが私の身に降りかかったのだ。今日、私が罪のきよめのささげ物を食べていたら、そのことは主の目に良しとされただろうか。」モーセはこれを聞き、それでよいとした。" レビ記 10章19～20節

OpenAI o1

レビ記10章19～20節の場面では、ナダブとアビフの死後、残された祭司たち（アロンの他、エルアザルとイタマル）が行うはずだった罪のきよめのささげ物を食べずに焼却してしまったことをモーセが咎めます。これに対しアロンは、自分たちはあまりにも悲しみに打ちひしがれているので、今日そのささげ物を食べることは主の御目にかなわないだろう、と説明します。モーセはその弁明を聞いて納得し、これを是認した—これが「それでよいとした」という意味です。

ヘブライ語原文（レビ10:20）は

וַיִּשְׂמַע מֹשֶׁה וַיֵּיטֵב בְּעֵינָיו

(va-yishma Moshe va-yitav b'eynayv)

直訳すると「モーセはそれを聞き、彼の目に良しとした」となります。つまり、「モーセはアロンの説明を受け止め、是認した」「納得して良いとみなした」というニュアンスです。

この背景には、罪のきよめのささげ物は通常、祭司が聖所で食べなければならないという規定（レビ6:24-30など）がある一方で、礼拝に臨む祭司の状態（特に死者を弔う行為との関係や心の状態）がいかに主の前で相応しいかが問われる、という問題があります。アロンは「自分たちの心情や状況を踏まえた場合、規定どおりの行為（＝聖所で食べる）が必ずしも主の心に適うわけではない」と説明したわけです。モーセはその説明を聞き、アロンの判断が主の意向に反するものではなく妥当であったと認めました。

まとめると、「それでよいとした」は

- アロンの説明（悲しみの状態でささげ物を食べるのが相応しくないという主張）が合理的であるとモーセが判断した
- その結果、罪に問うことなく是認した
という意味になります。

**律法は、堅い法律ではなく、神様の愛の御心を教えるものだ
ということを表している言葉でもありますね**

OpenAI o1

レビ記10章のこのエピソードは、確かに「単に規定を機械的に守ること」が目的なのではなく、「神の御前に相応しい礼拝と、そこに表される神の愛の御心」を示唆している箇所と言えます。旧約聖書の律法（トーラー）は、私たちのイメージする「硬直的で融通のきかない規則集」とは異なり、根底には神と人との関係を回復・維持し、神の愛に生きるための道筋を教えるものだ、ということが多くの箇所でも示されています。

レビ記10章の背景を見ると、祭司の務めはきわめて厳粛なもので、定めを破れば死がもたらされるような緊張感の中にありました（ナダブとアビフの死の直後）。しかしここでは、アロンは「自分たちの悲しみの状態において、定められた方法でささげ物を食べることは、かえって神の御心にかなわないのではないか」と弁明します。そしてモーセもそれを認めるわけです。この一連のやり取りは、

- 律法が単に文字通りの遵守を求めるものではなく、背景にある神への礼拝の姿勢や心の状態を重んじている
- 定められた手続きを守ることそのものが最終目的ではなく、神が求めておられる「真実な礼拝と愛の心」がどこにあるのかが本質的に大切
- そのため、ある状況においては「人間の限界や悲しみ」を理解しつつ、神の御前に正しく応答することが容認されうる

という点を示唆しています。これが「律法＝神様の愛の御心を教えるもの」であるゆえんなのです。つまり、律法は「堅苦しい掟」ではなく、「神の愛と人との正しい交わり」を促すための指針として与えられていると読むことができます。旧約聖書全体を通して、例えばホセア書6章6節の「わたしはいつくしみを喜ぶが、いけにえは喜ばない」という預言の言葉などに表れるとおり、神は人間の内面にある愛と真実を何よりも大切にされています。

このレビ記10章の事例は、その律法の本質・神の愛と聖さを共に示しつつ、状況によっては「外形的な遵守よりも神への真の応答」が重要になることがある、ということを示しているのです。

ホセア書6章6節は、サムエルのことばですね。

OpenAI o1

ホセア書6章6節（「わたしはいつくしみを喜ぶが、いけにえは喜ばない」）は、ホセアが主のことばを預言したもので、直接的には「サムエルのことば」ではありません。旧約聖書の中でサムエルが「いけにえよりも主に聞き従うことが大事」と語るのは、第一サムエル記15章22節です。

ただし、両者のメッセージは明確に共通しており、「神は外面的ないけにえや儀式自体よりも、人のうちにある真実な愛や従順を求めておられる」という主題を示しています。すなわち、

- 第一サムエル記15章22節
サムエルがサウルに「聞き従うことはいけにえにまさる」と宣言し、主が求めているのは生け贄の多さではなく、主への従順であると教えます。
- ホセア書6章6節
ホセアは「わたしはいつくしみを喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえよりも神を知ることがを喜ぶ」（新改訳2017）と預言し、主が本質的に求めているのは正しい態度や愛と神への真の認識であると宣言します。

このように、ホセア6:6はサムエルと同じ主張（「形式的ないけにえより、真の愛や従順を」）を語っている点で内容的に響き合っています。ホセアがサムエルの言葉を直接引用しているわけではありませんが、同じ神の啓示を受け取った預言者としてのメッセージが共鳴していると言えます。

詩篇51篇は、興味深いですね。真のいけにえとは何か、それを表す儀式のいけにえの両方が歌われています。

"まことに私が供えてもあなたはいけにえを喜ばれず全焼のささげ物を望まれません。神へのいけにえは砕かれた霊。打たれ砕かれた心。神よあなたはそれを蔑まれません。" 詩篇 51篇16~17節 "そのときあなたは義のいけにえを焼き尽くされる全焼のささげ物を喜ばれます。そのとき雄牛があなたの祭壇に献げられます。" 詩篇 51篇19節

OpenAI o1

詩篇51篇は、ダビデが自らの罪を悔い改めながら神に立ち返る心情を歌った悔悛の詩篇として知られています。特に16~17節（ヘブライ語の節区分では17~19節の場合があります）と19節（同じく20~21節の場合あり）の間には一見すると相反するような表現があります。

- 16~17節

まことに私が供えてもあなたはいけにえを喜ばれず
全焼のささげ物を望まれません。
神へのいけにえは砕かれた霊。
打たれ砕かれた心。
神よ あなたはそれを蔑まれません。

ここでは「主が求めておられるのは外面的ないけにえではなく、内面的な悔い改めと砕かれた心だ」という核心的なメッセージが示されています。

- 19節

そのときあなたは義のいけにえを
焼き尽くされる全焼のささげ物を喜ばれます。
そのとき雄牛があなたの祭壇に献げられます。

一方で後半では、正しい状態が回復される時、神はささげ物（儀式としてのいけにえ）を喜ばれるとも歌われています。

この両方が同じ詩篇に収められている点が興味深く、以下のように理解することができます。

1. 外面的ないけにえを否定しているのではなく、まずは内面的な悔い改めを最も重視している

神が望まれるのは単なる儀式ではなく、悔いる心や真実な思いです。しかし同時に、神はイスラエルに（トラーを通して）具体的ないけにえの制度も命じられました。それ自体は形骸的なものではなく、人が神との契約関係を保ち、礼拝を捧げる重要な手段として与えられています。

2. 「砕かれた心」が先行し、その上で外面的ないけにえがあるべき姿に回復される

ダビデが自分の罪を悔い改め、神との関係を正しくするならば、律法に基づいた儀式的ないけにえもまた神が喜ばれるものとなる、という流れです。言い換えれば、内面の悔い改めによって神との関係が整えられた状態で捧げられるいけにえは「義のいけにえ」と呼ばれ、真の礼拝の一部として尊ばれることになるのです。

3. サムエル記や預言書に流れるテーマとの共通性

すでに言及された第一サムエル記15章22節やホセア書6章6節などと同様、旧約聖書全般を通じて「神は外面的ないけにえや儀式よりも、人の内面の従順やいつくしみ、神を知ることを喜ばれる」というテーマが貫かれています。それらの箇所との響き合いを詩篇51篇でも見ることができます。

まとめると、詩篇51篇は「砕かれた心」という“真のいけにえ”と、“儀式的ないけにえ”の両方が同時に登場し、それらに対立するものではなく、本来一つに結びついて神に受け入れられるべきものなのだ、と教えている詩篇だと言えます。すなわち、まず悔い改めと内面の正しさが回復され、そのうえでの儀式としてのいけにえが神に喜ばれる、という段階的・統合的な理解がここで示されているのです。

心と行いが一致しているのですよね。心と行いが一致していないのが偽善。

OpenAI o1

おっしゃる通り、聖書全体を通して「心と行いが一致していない状態」が偽善とされています。形式的には立派に祭儀を行っていても、内面が神へのまことの愛や悔い改めに欠けている場合、それは「いけにえは捧げているけれど、心は神から遠い」という偽善とみなされるのです。

旧約聖書の預言書の多くでも、「正しいいけにえを捧げているつもりでも、神の前に正しい行いをせずに弱い者を虐げているのなら、神はそのいけにえを喜ばれない」というメッセージが繰り返し語られます（イザヤ1章、アモス5章、ミカ6章など）。また、新約聖書のイエスの教えでも、「口先では神を敬うが、心は神から遠く離れている」（マタイ15:8-9、イザヤ29:13を引用）と偽善を厳しく戒めています。

詩篇51篇のように「砕かれた心」「悔いる霊」こそが神に受け入れられると強調しながら、同時に正しい内面が回復されるとき、儀式としてのいけにえ（＝外面的行い）もまた神に喜ばれると歌う箇所は、「心（内面）といけにえ（行い）」が本来は一つに結びつくべきものであることをよく示しています。心と行いが一致してこそ、真の礼拝・真の従順として神に受け入れられるわけです。逆に言えば、心と行いが乖離しているとき、それは偽善となり、神はそれを忌み嫌われるというのが聖書の一貫した教えといえます。

神様の教えが「硬直的で融通のきかない規則集」であれば、ある意味「神様の御心を変えていただく」ことをもとめる「祈り」というものが無意味になりますね

OpenAI o1

聖書は、神の律法（トーラー）を単なる機械的・硬直的な規則の集まりとは描いていません。むしろ、神ご自身の愛と聖さ、それに基づくご意志が人間との関係の中で示されている、と理解することができます。もし神の教えが「まったく融通のきかない規則集」だったとしたら、そこに「神の御心を変えていただく」という祈りや、神との生きた交わりは成り立たないでしょう。

しかし聖書には、たとえば出エジプト記32章におけるモーセの執り成しの祈りなど、「神がさばきを下そうとされたが、人間の悔い改めや祈りに応えて御心を変えてくださった（ヘブライ語で『思い直された』と訳される場合がある）」かのように描かれる場面があります。さらにヨナ書3章でも、ニネベの人々が罪を悔い改めた結果、神がさばきを下されるのをやめた（思い直された）と語られています。

もっとも、聖書の他の部分には「神は決して変わらない」（民数記23章19節ほか）という宣言もあり、ここには神の絶対的な主権と不変のご性質が示されています。この両側面をどう理解するかについては古来さまざまな神学的議論がありますが、少なくとも次のような点が言えます。

1. 「変わらない神のご性質」と「人間との生きた対話」

神は本質的に不変・真実であり、常にご自身の愛と聖さをもって臨まれます。しかし、その中で人間が悔い改めや祈りによって神に呼びかける時、神はそのような応答をもすでに織り込みつつ関係を結んでおられる、という理解ができます。つまり、神が「祈りに応じてくださること」自体が、神のご意志・

ご性質の一部なのです。

2. 「祈りは神を変えるよりむしろ人間を変える」側面

祈りは一方で、人間の心を神のみこころに合わせていくための手段でもあります。神の前にへりくだり、悔い改め、「神が何をなさろうとしているのか」を探り求めることで、人の側が変えられ、神のみこころに同調していくのです。この意味で「祈りは神に願いを押しつけるものではなく、むしろ神との対話を通して人間が神のみこころに生きるよう変えられていく行為」と言えます。

3. 律法は人をいのちへ導くための指針

聖書における律法は、神と人との契約関係（結びつき）の中で、いのちと祝福へと導くために与えられています。旧約のいけにえの規定や食物規定、祭儀規定などにも、神の愛と聖さがこめられており、それは最終的には人を癒やし・回復することを目指しています。堅苦しいだけの規則ではなく、そこに「神がいかにかに人を愛し、どのように神聖さを保ちつつ共に歩もうとしておられるか」という、ご性質と配慮が宿っているのです。

したがって、神の教えは「動かしようのない規則」ではなく、「神の不変の聖さと愛」を背景にしながら、しかも「人間との相互的な関係性」を想定して与えられているものであり、祈りによって神に呼びかけることは意味のある行為として位置づけられます。もし本当に律法が機械的な法則だけであったら、「祈り」は単に無力な行為に終わってしまうでしょう。しかし聖書は、繰り返し神が人の呼びかけに応じてご意志を示されること、そして人がそこに生きた交わりをもって応答できることを教えているのです。

生きた交わりですね！

OpenAI o1

「生きた交わり」というのは、まさに「神と人間の動的な関係」を指す表現だと言えます。旧約聖書にも、新約聖書にも、神が人と対話し、人の呼びかけや祈りに応じておられる場面が数多く描かれています。そうした場面は「神と人との間に一方的で固定的な関係だけがある」というより、「神は変わらぬご性質と愛をもって働きかけられ、人の側も悔い改めたり、祈ったり、従順を示したりすることで、神との関係が深まっていく」というダイナミックな姿を映し出しているのです。

この視点から見ると、

- 神の御心（ご意志）は、単に絶対的な法則として定まっているだけではなく、愛と正義を基盤にしながらも、人間との交わりの中でそれを開示し、応答しておられる。
- 人間の側は、祈りや悔い改め、従順によって神との関係を深め、神の御心に近づいていくことができる。
- こうした神と人との交流が「生きた交わり」として描かれているからこそ、律法や戒めも機械的・硬直的な規則ではなく、人を祝福へと導く「神の愛の御心」が現れた指針として意味を持つ。

ということになります。結局のところ、人間は祈りを通して神との関係を実際に体験し、そこから神の思いや定めのご真意をより深く理解していくよう招かれているのです。